

青少年くらし

家庭版

発行 倉敷市教育委員会
編集 生涯学習課
☎ 426-3845

6月



「生徒、同僚、保護者、地域の方々から教えてもらい 確立された私の教育理念」

今回は、昨年まで倉敷高等学校で校長をされていまして仁科康先生の、様々な経験を踏まえたお話を紹介したいと思います。先生は、倉敷市教育委員会学校教育部長や、倉敷市立東中学校校長などを歴任され、教育行政、学校現場の要職をこなされました。日々刻々と社会情勢が変化し、様々な環境のもとで暮らしている将来の宝といえる子どもに対し、大人（親）はいかに接していけばいいのかという課題に、先生の話の中にヒントがあるのではないのでしょうか。

豊かな感性にあっばれ

生徒の感性には鋭いものがあります。怖いほど学校の体制や教職員の人間関係を察知したり、空気を感ずったり。そしてびっくり仰天その通りなのです。「今朝、夫婦喧嘩したんか。」「先生の中にも派閥があるんじゃないろう。」「あの先生は、むしろが何をしても、見て見ぬふりをする。」

どのような状況で、どの生徒の発言か、その意図は何か。間違いなく彼らは私たちに警鐘を鳴らしてくれていたのでしょう。このような生徒の目に映った生々しい批判的な声が

聞けるようになったのも生徒との人間関係づくりを基盤とした学級経営が基本であったと思ひ返されます。

学級経営との出会い

教師として赴任した昭和五十年代。教育界ではあまり耳にしなかった「学級経営」を校長先生が全面的に運営方針として打ち出され、「学級

経営は子どもたちの人間形成に向けての基盤であり、教師が思いを凝らして師弟級友ともに励み歩む学級の教育活動の機能である。」といつも語っておられました。



この「学級経営」というテーマに同僚の先生方の研究は目を見張るものがあり、新米である私にとって、先生方の一挙一動が学びの場でした。「朝の会では、一日の出会いを大切に、生徒がはつとした顔でこちらを向くような話をする。」「生徒の考

え方を重視し、結論までの過程を大切に。」「自分たちの問題は自分たちで討論し、解決する。」など見様見真似で生徒へのかかわり方を多くの先生方から盗みました。

そして、生徒の学習活動をきちんと評価し、生徒や保護者にしっかりと伝えること。そのためには生徒を細かく観察し、かかわっていくこと。この姿勢を貫くことでした。

この若い時代の経験が、生徒の発する言葉を傾聴し、行動を観察することにより生徒の「喜び」「楽しみ」「悲しみ」「苦しみ」をしつかり感じ取ることの大切さに繋がっていったと思います。

窮地を救ってくれる生徒

一通りの教師としての経験を積み、舞台は二校目の大規模校へ。学級経営を意識し、生徒の言動を評価しようと学級通信を二日に一回程度発行することから手掛けました。す

ると毎日記事のネタを探す中で生徒の良い点に不思議と視点が向くようになりました。「ああ、これが生徒指導か。これが学級経営の真髄か。」と自分なりに何かを掴んだような気がしました。

一人一人の生徒の成長を評価し、かわりが深まる中、やがて生徒も教師の気持ちを理解してくれるようになりました。

そして、私の力量の無さから様々な場面で窮地に立たされましたが、救ってくれたのは生徒でした。文部省（現文部科学省）指定の研究会の準備で職員は休む暇もなく誰もがふらふらな状態でした。研究会当日、

気持ちを含んでくれたのは、授業で積極的に発言してくれた生徒で

「バランス」 モダンテクニック

倉敷市立庄中学校2年 細羽 彩良（令和2年度）
頭に思い浮かんだものを組み合わせてみました。物がバランスを取っているように見せたかったので角度を変えて貼りました。





地域の皆様と教員、生徒がいっしょになって実施する、活気あるあいさつ運動。

した。また極めつけは卒業式。ある生徒が「最後だから校歌を大声で歌わんとこらえんぞ。」とみんなに声をかけ、体育館が割れんばかりの校歌斉唱。感動という一言では言い表せない身震いがした一時でした。教室では涙ばかり出て言葉にならないかったことを今でも覚えています。まさに筋書きのないドラマを演じてくれた生徒たちに心から感謝しています。

力 保護者、地域の方々の絶大なる

た。そんな時、疲弊した教師の姿、生徒の実態を見るに見かねて駆けつけてくださったのが、PTAや地域の方々でした。対応を協議する重苦しい空気の中で「先生たちのために何か我々ができることをしよう。」と親身になって考え、教師の背中を押してくださいました。早速、朝のあいさつ運動が始まり地域の方、保護者、教師、生徒から校門を通る生徒に一齐に「おはよう」と温かい声が注がれました。

「継続は力です」。口を閉ざしていた生徒からぼそぼそと「おはよう」と返ってくるようになりました。さらに相乗効果として地域の方や保護者も学校の様子や対応が少しずつ変わり、学校に批判的でなく、協力的に生徒に声をかけてくれるようになり、生徒の様子も徐々に良い方向に変化していきました。その頃の生徒も今は立派な社会人になり大活躍しています。

そして、教員生活の集大成となる学校に校長として赴任しました。今までの経験をもとに、開かれた学校づくりを目指し、地域の方々とともに子どもを育てたい一心で、いろいろな方々との繋がりを持つことから

スタートしました。

間もなく、地域の老人会の方とグランドゴルフをきっかけに良い関係を築くことができました。「子どもたちのために何かできないか。」と老人会の定例会で協議され、花壇の世話、あいさつ運動等で生徒に声をかけてくれることになりました。教室ではできない、ご高齢の方々もふれあうすばらしい教育の場ができあがりしました。活動を通じて人の心の温かさを肌で感じている子どもたちが親となり、家庭、地域でこの恩を引き継いでもらいたいと切に願っています。

将来を担う若者に期待と願い

定年退職後、倉敷高等学校に勤務することになりました。年若いのも元気が出るのは、純粹で、人懐っこい、そして心温かい生徒たちのお陰です。朝、校庭を歩いていると「おはようございます。」汗を流して作業していると「ありがとうございます。」

「先生、熱中症にならないように気を付けて。」もう言葉では表せないほどのエネルギーを湧き立たせてくれます。友だち関係で学校に来にくくなった後輩と一緒にご飯を食べようと声をかける先輩。令和二年

七月豪雨被災者のために募金活動をする生徒。早朝から部活動に打ち込む生徒。きれいな環境を維持したいと清掃する生徒。私が学生時代にはできなかったことです。

ある日、女子生徒が中学校の恩師からもらったすばらしい言葉を紹介してくれました。「人は一生懸命してあげれば、必ず見ている人がいる。必ず助けてくれる人がいる。」

彼女はその言葉を高校生活の中で実行していました。「現代の若者は」とよく言われますが、私が思うに「現代の若者こそ、私より何倍も優れた感性を持ち、豊かな心を持っていると感じています。」

若者の皆さん。これからの長い人生、紆余曲折があると思いますが、大きく道を外れずに自分の兼ね備えている力を思う存分発揮し、人々の心が通い合う温かい社会を築いてほしいと願っています。



中庄駅前募金活動を行う、倉敷高等学校JRC部員。